

氏名	橋村 直樹
学位	博士
専攻分野の名称	文学
学位授与番号	博甲第4180号
学位授与の日付	平成22年 3月25日
学位授与の要件	文化科学研究科人間社会文化学専攻 (学位規則(文部省令)第4条第1項該当)
学位論文題目	アンドロニコス2世帝治下の後期ビザンティン聖堂壁画研究 —ヴェリアの救世主キリスト復活聖堂のフレスコ壁画と画家 カリエルギス—
学位論文審査委員	主査・教授 山口 和子 准教授 鐸木 道剛 准教授 龍野 有子 准教授 出村 和彦

学位論文内容の要旨

本論文は、ヴェリアの救世主キリスト復活聖堂のフレスコ画（1314/15年の銘文あり）について、またそれを描いた画家カリエルギスについて、橋村直樹自身による現地調査に基づき、また先行研究を踏まえ、主にマケドニア地方の後期ビザンティン聖堂壁画を比較の対象としながら考察したものである。全部で7章からなり、2部に分けられ、さらに最後にひとつの補論が付けくわえられている。

第1部において、キリスト復活聖堂の壁画研究として、ペレカニディス（1973年）とパパゾトス（1994年）の先行研究を参照しつつも、中世ギリシア語史料の新たな解読と解釈に従って、聖堂創建の経緯とその後の所有状況ならびに壁画の個々の図像について（第1章）、また新約諸場面と旧約の預言者像、そして装飾プログラム全体については、カロピシ＝ヴェルティの寄進者研究（1992年）とグラヴゴールの旧約預言者銘文研究（1979年）の先行研究を援用して（第2-4章）、さらにはフレスコ壁画の様式とそれを描いた画家については、マルコヴィチらの同時代のセルビア壁画研究（2004年）などを踏まえつつ、さらに考察を加えている（第5章）。

また第2部において、パレオロゴス朝美術研究として、キリスト復活聖堂のフレスコ画と同時代の聖堂壁画の様式に関して、キリスト復活聖堂壁画の銘文に名前の残る14世紀初頭の画家として著名なカリエルギスについて、現存する作品との様式比較によって、ビザンティン後期のパレオロゴス朝美術史上のその位置を考察している。失われた作品が多くなかでの様式論に限界はあるが、同時代のコンスタンティノーブルとアトス、そしてセルビアの作品との比較によって、カリエルギスの壁画の様式の特徴が明らかになっている（第6章）。さらにパレオロゴス朝期になって、より一層重要な役割を果たすようになった予型論的表象についての考察を行っている（第7章）。また補論では、ヴェリアの現存するパレア・ミトロポリ聖堂における旧約の預言者について考察している。

本論文によって、橋村直樹はヴェリアの救世主キリスト復活聖堂のフレスコ壁画に関する独自の装飾プログラム論を展開し、さらにはアンドロニコス2世帝治下の、特にマケドニア地方における後期ビザンティン聖堂壁画の特徴について明らかにした。

博士後期課程9年の歳月を費やしての成果であり、本文340頁（原稿用紙917枚）、367点の参考文献、212枚の図版の大作である。

学位論文審査結果の要旨

ヴェリアの救世主キリスト復活聖堂の壁画が、南北壁面においてキリスト伝諸場面の下に預言者像を配してしかもそれぞれの預言者が銘文を持ち、その上下2つの層が予型論的（旧約は新約を先取りする）構造になっていること、壁画全体の終末論的プログラム、そしてキリスト復活の場面のエヴァが寄進者の肖像であることを根拠に、この聖堂が墓所聖堂であるとの結論を導いている。その論証は中世ギリシア語銘文の厳密な解読を踏まえて具体的で着実であり、可能な問題点はあらゆる面から丁寧に拾い上げており、従来ビザンティン後期壁画についての権威であるセルビアのヴォイスラフ・ジュリッチ（1976年）やツィトゥリドゥー（1997年）が印象批評的に類推してきたことを実証的に示した功績は大きい。

またこの立証の途上で明らかになったこと、つまり画家が同時代の肖像をキリスト伝の登場人物に描きこむこと（この場合は画家カリエリギスが、寄進者の妻エウフロシニを、キリストの復活図像のなかのエヴァとして描きこんでいる）については、ビザンティン美術ではマケドニア朝、西欧ではカロリング朝以来の作例がなくはないが、極めて稀なことであり、聖書解釈の方法の点からも極めて重要なトピックである。ここで14世紀のヴェリアでの作例を挙げ得たことは、今後の議論に重要な影響を与えることになると思われる。

また14世紀初頭の画家カリエリギスに関して、ビザンティン時代の画家の領分についての解釈は、様式的考察を踏まえた精緻なもので、銘文に名前を記すこと自体が中世における画家の自意識の表れとするアンソニー・カットラーら西欧の研究者の安易なロマン主義解釈に流されることなく、冷静に分析しているところはわが国の西洋中世美術研究のひとつの模範を示したともいえる。

博士論文は定めた論点についてはすべての文献が精査されるべきであるとの方針に従って、欧米での先行研究については英仏独伊語はもちろん留学先のギリシア語やセルビア語文献も渉猟しており、2008年にモスクワで発刊された論文集に掲載されているアテネ大学のチガリダス教授によるロシア語論文は、12月末の提出時には入手できていなかったが、その内容について最終的な論文では論評されることになっている。

本論文は国際的水準の論文として博士号を授与するにふさわしい業績であり、新知見を含んでの寄与であるので、英語ないしギリシア語での公刊が望まれる。